

県遺族会が遺品寄贈

歴史館へ230点「戦争の一端知って」

戦没者遺族の高齢化に伴う関係資料の散逸を防ぐと、高知県遺族会（大石綾子会長）は21日、会員らに呼び

掛けて集まった手紙や軍服など約230点を、南国市岡豊町の県立歴史民俗資料館に寄贈した。同館が調査した上で、公開可能なものは展示する予定。

同会によると、戦後70年がたつて戦没者の妻や遺児は高齢化が進み、死去も相次ぐようになった。その中で、保管場所が不明になっ

たり、引き取り手がいなくなったりする戦時資料も増えているという。

このため、県遺族会は資料の保管や展示について同館に協力してもらうこととし、2013年末から約5千人の会員に向けて戦時中の資料の寄贈に応じるよう呼び掛けていた。今回の寄贈は今年7

月末までに県内の12人から寄せられた資料。復員者の資料も含め、同館が「保管可能」と判断したものが提供された。

このうち、高知市の男性は父から家族に宛てた手紙を寄せた。横須賀海軍工作学校（神奈川県）や佐世保海兵団（長崎県）から「海軍の軍隊生活にも慣れ

てきた。家のことさえ思わねば、大した苦勞はない」などと記した内容で、切手の下には「検閲済」の印が押されている。

このほか、虎の刺しゅうが入った千人針「武運長久」と手書きされた日章旗、海軍の軍服なども寄贈された。

大石会長は「展示されたら、戦死された方々が家族を思う気持ちなどを断片的であっても多くの人に読んでもらい、戦争の一端を知っていただきたい」と話している。

県遺族会は引き続き会員に限らず、資料提供を呼び掛けている。問い合わせは同会（0888・8884・8700）へ。

県遺族会に寄せられた資料（高知市吸江の県遺族会事務局）



（楠瀬健太）